

## 後藤竜二作品と

### 〈委員会の論理〉

皿海 達哉

私は、二〇一〇年、日本児童文学者協会賞の選考委員を委嘱され、事務局から送られてきた本を五〇冊読んだ。その中に後藤君の『ひかる！3／本気へマジ』走る！』（そうえん社）があった。この作品については、次のメモが残っている。

中井正一の『委員会の論理』を彷彿させる作品。仲間を描かせば作者の独擅場？ 4年生を中学1年生に6年生を中学3年生にしてもよいくらいの迫力だ。主人公の少女・尾関ひかるの父親は戦場取材のカメラマンで、39歳で亡くなっているが、このへんにも作者の社会的な視点と正義感とが表われている。しかし、長野・川島以外の6年生や5年生が読んだら嘆くのではないか。余りに4年1組をひいきしすぎている。堂崎先生が夜一人学校に残って生徒たちの日記を点検しているというのも叙情過多。作者が彼女に肩入れしたくなるのは理解できるけれど、他にもそういう教師はいくらもいるし、ごく当たり前のことをしているのに、カッコよく描きすぎる結果になっている。やはり「委

員会の論理」は、教員団にも及ぼすべきだろう。（後略）

今回、『ひかる！2／本気へマジ』怒る！』を読んだ。この作品もやはり中井の『委員会の論理』を思い出させる。「怒る」の自身は、6年生が上級生風を吹かせ、昼休みに楽しく遊んでいる下級生をサッカーゴールのエリアから追い出してしまいう理不尽さへの怒りである。これを二学年も下の4年1組の生徒が団結して改めさせるのである。

まず、現状の確認。〈緊急学級会〉で司会と書記がみんなの6年生への不満を聞き、黒板に列挙する。そして「たかがサッカーゴール」の問題ではないと問題を普遍化し、具体的な解決策を検討する。この過程でサッカー部内部の上下関係や、6年の該当クラスにいる兄が身体的ハンディのためじめられている事実なども明らかにする。最後は、みんなで書き上げた〈抗議文〉を、ひかるが代表して届け、6年生は「もう暴力は絶対に使わず、下級生にやさしさでつながり、人間らしく楽しい学校にするよう、努力を続け